



# 西表島の炭鉱

西表島炭鉱跡の保全・利用を考える検討委員会編

## はじめに

沖縄県の南に位置する西表島は、沖縄本島に次ぐ大きな島です。島のほとんどが山林におおわれた島ですが、この島の西部地域には石炭を埋蔵した地層があります。近世の終わりごろからその存在が知られていましたが、採掘が始められたのは明治期以降になってからでした。そして採掘は、第2次大戦後の一時期まで続きました。

日本の工業化や国力増進に後押しされて、密林をかきわけて採掘が始められたのです。坑夫の多くは九州の炭鉱地帯や台湾、沖縄本島などの島外からやって来ました。地底深く掘り進み、労働環境の悪い中、坑夫たちは昼夜わかたず働き続けました。

そこはまた、マラリアのはびこる有病地でもありました。このためマラリアにかかり命を落とす坑夫たちもいました。労働のあまりの厳しさから逃れるため、逃亡を企てる坑夫もいました。

しかし、こうした炭鉱の歴史はこれまであまり知られていませんでした。私たちは日本の近代化・工業化に炭鉱のはたした役割とともに、多くの犠牲のあったことを忘れてはなりません。

そこで炭鉱の歴史をしっかりと学び、その歴史を伝える産業遺跡を守り伝えていくため、ここに西表炭鉱の歴史についての冊子をまとめてみました。この冊子が埋もれた郷土の歴史を知る一助となれば幸いです。

西表島炭鉱跡の保全・利用を考える検討委員会

## 目次

西表島の概要	1
石炭とは	2
西表島の石炭	7
西表島の炭鉱	8
圧制炭鉱 ～なぜ闇の歴史の舞台となったのか～	21
外国人坑夫たち	25
西表島の炭鉱年表	25
今も残る西表島の炭鉱遺構群	27
石炭と西表島の炭鉱に関する問題	29
参考文献・情報入手先	30

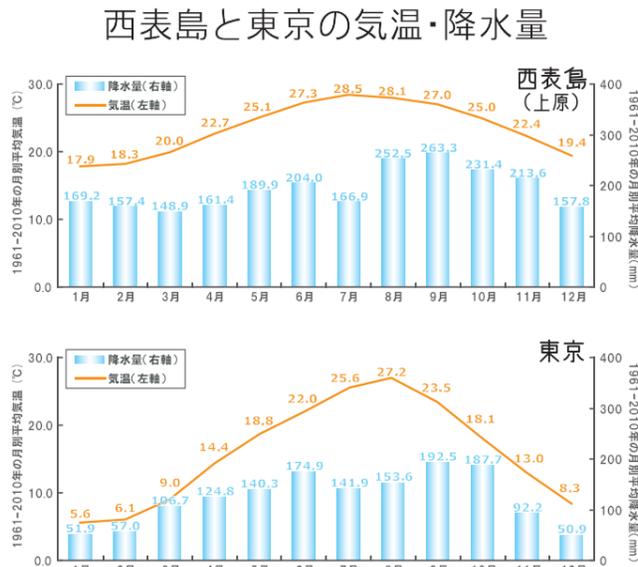
この冊子では社名などの固有名詞を除き、坑口・坑道を指し示すか関連する場合には“炭坑”を用い、それ以外は原則“炭鉱”を用いた（例えば、西表島の炭鉱、南風坂の炭鉱など）。

# 西表島の概要

西表島は日本の最南端に位置する竹富町の島の一つで、沖縄県では沖縄本島に次ぐ大きな島です。その周囲は130km、面積は292.5km<sup>2</sup>あります。

西表島は亜熱帯海洋性気候に属し、イリオモテヤマネコやカンムリワシなどの特別天然記念物、国内で最大のマングローブ林やサンゴ礁などの豊かな自然が今もなお残っています。

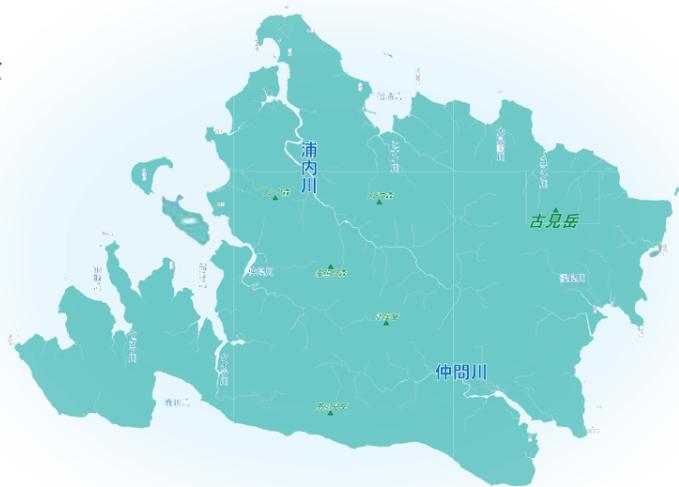
西表島の年間平均気温は、東京の16.0℃に対し8.5℃も高い23.5℃ですが、気温差は東京が21.6℃に対し西表島は10.6℃しかなく年間を通した気温の変化が小さいといえます。年間降水量は東京が1,474mmなのに対し、降水量は840mm以上も多い2,316mmとなっています。



西表島は約1500万年前に海中から隆起した大陸の一部で、今のような島になったのは5万年前頃といわれています。

西表島は河川が多く、北部に沖縄県最大の河川である浦内川、南部には日本最大のサキシマスオウノキや天然保護区域に指定されているマングローブ林を有する仲間川があります。

東部には西表島で最も標高が高い古見岳(469m)があり、島の南東部と石垣島の間には、石西礁湖と呼ばれる日本最大のサンゴ礁地帯があります。



# 石炭とは



石炭は「燃える石」「黒いダイヤ」などと呼ばれ、私たちの生活にかかせない存在であり、かつては身近なところから産業分野まであらゆるところで使われていました。石炭があったからこそ、我々人類は近代工業化への道を歩むことができたと言っても過言ではないのです。

## 石炭の特徴

石炭には、利用する上で利点と欠点があります。利点は、大量に存在し安価(あなか：安いこと)であること、固体であるため特別な容器などを必要とせず運搬できることなどがあげられます。これに対し欠点は、重油などに比べ発熱量が低いこと、燃焼させると温室効果ガス(二酸化炭素など)や硫黄酸化物(いわゆる

**利点**…大量にある  
安い  
固体で運搬しやすい など

**欠点**…発熱量が低い  
有害物質の発生量が多い など

さんかぶつ)など有害物質の発生量が多い点です。  
利点であった”固体である”という状態は、技術の進歩にともなって逆に欠点となってきました。固体である石炭と比べ、石油や天然ガスのような液体燃料は、大量の採掘や輸送などでは扱いやすいためです。

## 石炭のできる過程

石炭は、古生代シルリア紀から新生代第三紀にわたって繁茂(はんも：植物が生い茂ること)していた植物の化石です。単に植物の化石といっても、シルリア紀から第三紀までは約4億年あり、その間に繁栄した植物も変化しています。

最初の陸上植物はシダ類植物といわれ、シルリア紀からデボン紀を経て、石炭紀から二畳紀にかけて最盛期を迎えました。特にデボン紀中期から石炭紀を経てジュラ紀に生存した裸子植物である種子シダ類などの隠花植物(いんかしょくぶつ：花をつけない植物の総称)は、欧米や中国などで産出される石炭の元となっています。

これに対し日本の石炭は、地球上の気候帯などがはっきりしてきた中生代末期から新生代にかけて生存した被子植物や、イチョウ類などの裸子植物を含めた顕花植物(けんかしょくぶつ：花をつける裸子植物と被子植物の総称)からできています。

同じ石炭といっても、場所や時代、元となる植物進化の過程により異なっていることがわかります。

地質時代	年代	代表的炭種	日本の炭種	現れた生物の変遷
古生代	カンフリア紀			三葉虫・脊椎動物(魚類)
	シルリア紀	石墨		シダ類植物(隠花植物)
	デボン紀	無煙炭		両生類
中生代	石炭紀			種子シダ類、昆虫・は虫類
	二畳紀	れき青炭	無煙炭	種子シダ類からソテツ類が分化
	三畳紀			恐竜・哺乳類
新生代	ジュラ紀			鳥類
	白亜紀			被子・裸子植物(顕花植物)
	第三紀	褐炭	れき青炭	
	第四紀	泥炭	褐炭・亜炭・泥炭	人類

石炭が太古の昔に生えていた植物からできたことは先ほど説明しました。では、その植物がどういう過程を経て石炭になっていくのでしょうか。

海や湖など水辺の近くに生えていた巨大なシダ植物などは、枯れて倒れたあと徐々に埋まっていきます。埋まった植物は微生物による腐朽分解(ふきゅうぶんかい：くさってぼろぼろになること)を受けながらさらに地中深く埋まり、泥炭(でいたん)になります。泥炭になった植物は、マグマなどの地熱と地圧の作用を受けながら石炭となります。地圧は数百気圧～数千気圧、地熱は最大で200℃くらいと推定されています。

泥炭から石炭への化学反応が進行する自然の作用を“石炭化作用”といい、その石炭化の程度(石炭化度)は含まれる水分、炭素の量などで表すことができます。石炭は埋まっている場所が深いほど年代が古いため、地熱により加熱された時間が長く石炭化度は高くなります。

### コラム -珪化木(けいかぼく)-

地層中に埋まった樹木の細胞内や細胞壁に珪酸がしみ込んで、硬くなったものを珪化木といいます。とても硬いため保存されやすく、樹木の年輪や組織がきれいに残されています。

石炭とほぼ同じところで見つかりますが、硬く重いため石炭を掘り出す際は障害になります。石炭になりかかっている状態のものもあり、石炭になることができなかった樹木ともいえます。



(あたん・かたん)、泥炭(でいたん)などに分類されています。

無煙炭は石炭化度が高く良質の石炭で、カーバイドなどの原料に利用されます。れき青炭はコークスや製鉄用燃料、垂れき青炭がボイラー燃料、褐炭が家庭用燃料などに利用されています。埋蔵量が多い垂れき青炭は利用研究が進められています。

西表島の石炭は、れき青炭～垂れき青炭で良質でしたが、埋蔵量は少なかったようです。

分類	石炭化度	性状など	主な用途
無煙炭	高い	石炭化度が高く、煙が少ない良質の石炭	カーバイドの原料など
れき青炭	西表島の石炭	粘結性が高い	コークスや製鉄用燃料など
垂れき青炭		れき青炭と似るが、水分が多く発熱量が低い	主にボイラー燃料(埋蔵量が多く利用研究が進められている)
褐炭		低品位の石炭	練炭・豆炭などの家庭用燃料など
泥炭	低い	泥状の石炭で品質が悪く、工業用に使われない	日本では戦争末期に貴重な燃料として使われた

カーバイド：炭素を含む化合物。ランプの燃料やアセチレンの製造などに使う。  
コークス：炭素の純度を高めた石炭で、発熱量が高い。

## 生活必需品だった石炭 ～家庭から産業まで～

石炭はストーブの熱源、蒸気機関車や船舶の燃料、練炭・豆炭に加工され“あなか”や“こたつ”など暖房器具のほか、七輪(しちりん：木炭や豆炭などを燃料とした炉)など調理用熱源として、かつては身近な生活必需品でした。こうした石炭をもとにした生活用品を目にすることは少なくなりましたが、石油がエネルギーの中心となる前は石炭がその主役だったのです。

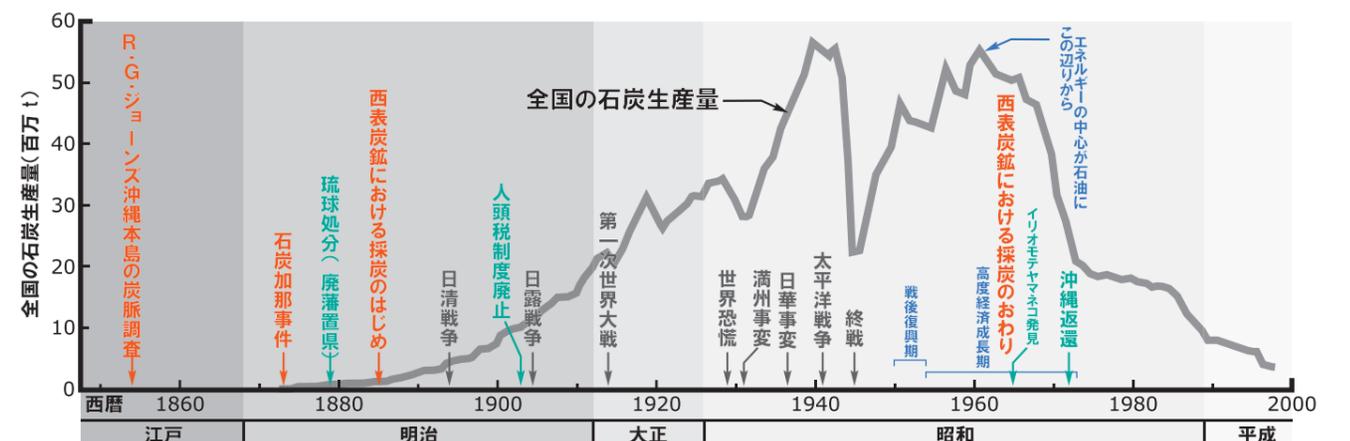
産業では火力発電所や製鉄所のほか、セメントをつくる工場などで今も使われています。

## 石炭と時代とのかかわり

人々の生活に欠かせないものとして、日本の石炭は130年以上も前から採炭(さいたん：石炭を掘ること)されてきました。日本の石炭生産量は1940年前後と1960年頃に年間5,000万トン以上となりしピークを迎えましたが、エネルギーの中心が石油に変わり始めた1960年代以降、急激に減少しました。

その間にも石炭の生産量は第一次世界大戦、世界大恐慌、満州事変や太平洋戦争など、その時代の経済や社会的背景により変化する石炭需要(じゅよう：もとめること)に応じて増減を繰り返してきました。

こうした世界情勢とそれに伴う日本の社会全体をとりまく変化は、当然西表島の炭鉱にも影響がおよび、多くの石炭が必要となった時代には、ひどい労働環境のもとで苛酷(かこく：きわめてひどい)な採炭がなされていました。



## 石炭の形成過程



① 今から数千万年前～数億年前、湿気が多い湖などの近くに大きなシダ類などの植物が生えていました。



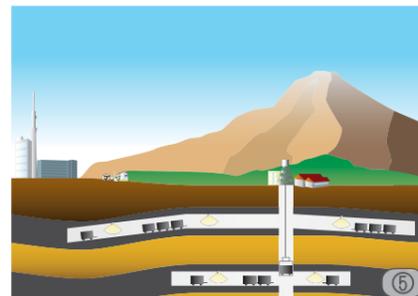
② 枯れて倒れた植物は、その上に土や砂が積もって徐々に埋もれていきます。



③ 埋もれた植物は微生物による腐朽分解を受けながら、泥炭化していく過程で地殻変動のため地中深くに閉じこめられていきます。



④ 地中に閉じこめられた植物は、地熱と地圧による作用を長時間受けながら石炭になっていきます。



⑤ 長い時間をかけて植物は石炭の層になり、私たち人間はこれを掘り出して利用しています。

## 石炭の種類

石炭は、炭素、酸素、水素でできており、炭素の量が多いほど火力は強くなります。また、石炭化度の違いによって、無煙炭(むえんたん)、れき青炭(れきせいたん)、垂れき青炭(あれきせいたん)、垂炭・褐炭

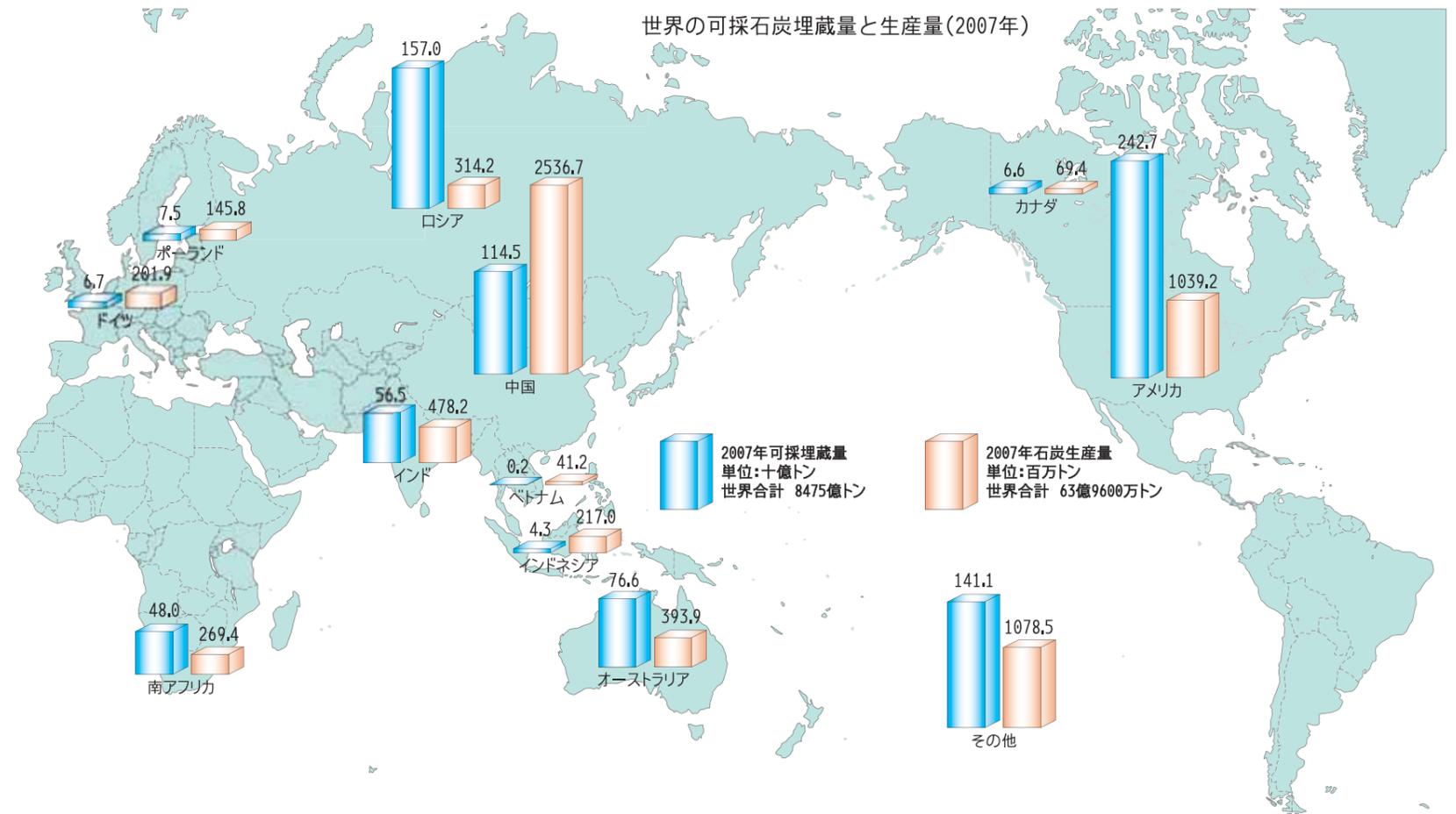
## 石炭の埋蔵量と生産量

世界において採炭が可能な石炭(可採石炭)の埋蔵量はアメリカが2,427億トンで最も多いのですが、生産量は1985年(昭和60年)にアメリカを抜いて以来、中国が第一位となり、2007年は世界生産の39.7%を占めました。

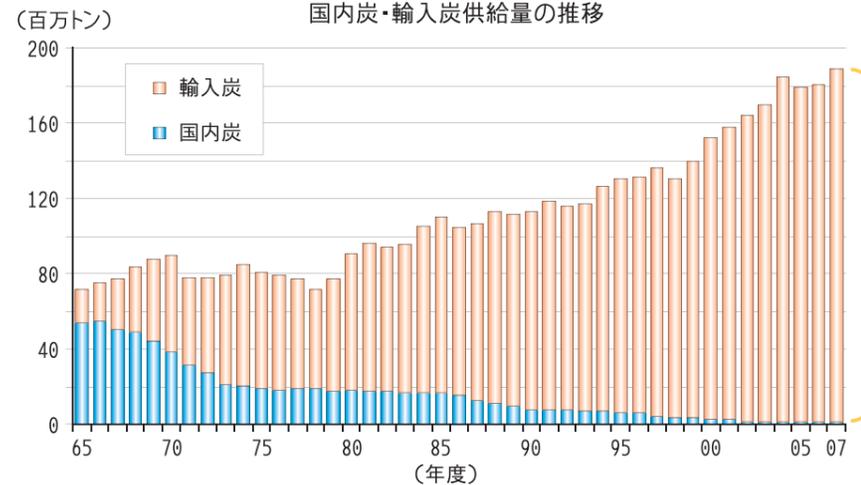
主要生産国は、中国、アメリカ、インド、オーストラリア、ロシア、南アフリカ、インドネシア、ドイツ、ポーランドなどとなっています。

現在、我が国は石炭の国内供給のほぼ全量(99%以上)を海外からの輸入に依存(いぞん：ほかに頼ること)しています。国内の石炭生産量は、1961年度に5,541万トンでピークとなりましたが、石油への転換の影響と1980年代以降、割安な輸入の石炭の影響を受けて減少を続けました。なお、国内炭の2007年度の生産量は128万トンで、ほとんどが発電用に消費されています。

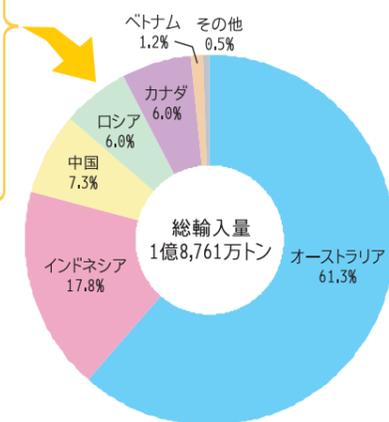
輸入炭の量は1970年度に国内炭の生産量を上回り、1988年度には1億トンを突破、2007年度は1億8,761万トンと過去最高に達しました。同年度、石炭の輸入先はオーストラリアが61.3%を占め、インドネシア(17.8%)と中国(7.3%)が続きます。



国内炭・輸入炭供給量の推移



日本の石炭輸入元(2007年度)



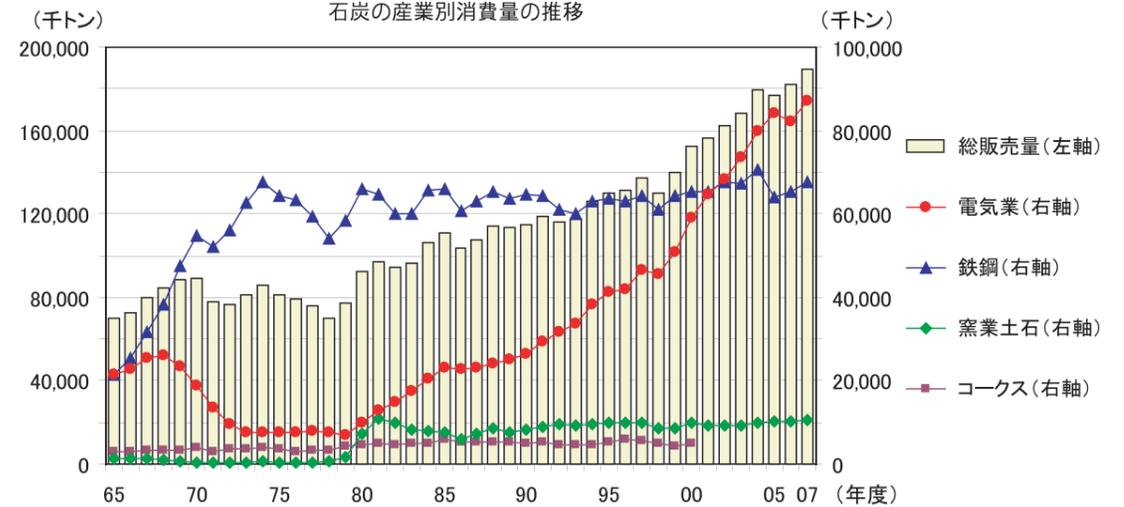
## 石炭の消費量と最近の利用

主な業種における石炭消費量は電気業が8,702万トンで最も多く、次いで鉄鋼の6,763万トンとなっており、この2つの業種で全消費の82%を占めています。

電気業における石炭消費量は、1960年代後半に2,000万トンを上回っていましたが、石炭火力発電の石油への転換が進んだことから1975年度には757万トンにまで低下しました。しかし、1979年(昭和54年)の「第二次オイルショック」以降は、石油に依存しすぎる産業構造を変える政策の一環として石炭火力発電所の新設及び増設に伴って石炭消費量は再び増加に転じました。

資源の乏しい日本でエネルギーを安定供給するため、石炭は石油や天然ガス、原子力、新エネルギーとともにエネルギーの「ベストミックス」を構成する重要な一次エネルギーとして位置づけられています。

石炭の産業別消費量の推移



## 石炭の今後

埋蔵量の多い石炭は、発展途上国を中心として急激に需要が増加しています。こうしたなか、効率的な石炭の利用を進める必要があります。

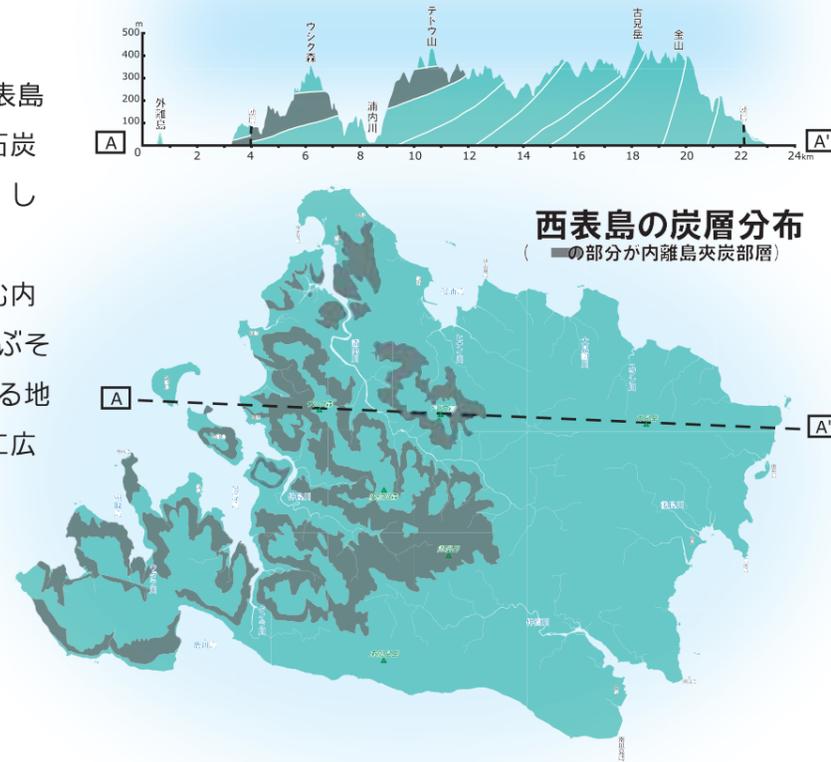
これからは地球温暖化などのグローバルな環境問題に対応し、エネルギーの安定供給と持続的な経済成長をもたらすためにも、石炭利用の革新的(かくしんてき：これまでの習慣をあらためて新しくすること)な技術である「クリーン・コール・テクノロジー」の推進(すいしん：前へおし進めること)・開発に努力することが求められています。

# 西表島の石炭

## 西表島の炭層

沖縄県で採炭が行われたのは、西表島だけでした。というのも沖縄県内で石炭が見つかったのは西表島だけで、しかも島の西側だけなのです。

西表島の地質を見ると、石炭を含む内離島夾炭部層(うちはなれきょうたんぶそう、八重山夾炭層ともいう)と呼ばれる地層は、島の中央付近から西部と北部に広がっているのがわかります。(■の部分の内離島夾炭部層)



## 西表島の石炭質

石炭化度が高い石炭は、効率よく燃えるため発熱量が高くなります。西表島の石炭はれき青炭～垂れき青炭が多く質の良いものでした。質の良さは数字にも表れています。

国産の石炭が通常1キログラムあたり5,500～6,000キロカロリーを発熱量であったのに対し、西表島の石炭は7,000キロカロリーもありました。そのため、まとまった量で生産(採炭)できればかなりの利益が得られるとまでいわれました。しかし、西表島の炭層(たんそう：石炭の層)は厚さが30cmくらいしかないことに加え、たくさんの断層(だんそう：地層などが割れたところを境にしてずれているところ)があるため細かいブロック状になっており、

効率よく採炭することができなかつたのです。

そのうすくブロック状に細かくなった炭層からの採炭は苛酷な労働でした。

西表島の石炭分析結果例

試料採取場所	水分 (%)	灰分 (%)	揮発分 (%)	固定炭素 (%)	発熱量 (kcal/kg)	全硫黄 (%)
崎山地域野浜崎	1.90	2.83	34.44	60.83	7,460	1.57
〃 左1番川	1.63	9.22	33.24	55.91	7,650	2.67
内離島アラスコ崎	3.33	10.62	45.01	41.04	6,960	0.77
元成屋地域西海岸	2.93	4.91	47.47	44.69	7,520	2.76
〃 南海岸	4.12	7.03	45.09	43.76	7,230	4.14
〃 木炭川上流	3.28	2.85	35.46	58.41	7,670	1.75
仲良川 1番川上流	2.39	7.41	47.24	42.96	7,220	5.42
〃 2番川上流	2.82	6.47	46.69	44.02	7,260	2.98
浦内川宇多良川下流旧坑口	3.33	5.19	44.43	47.05	7,350	1.03
〃 カスク川上流	4.05	1.13	46.86	47.96	7,570	1.17
上原地域松山炭鉱	7.99	5.01	39.32	47.68	6,860	3.61
〃 旧坑口	4.55	3.71	44.29	47.45	7,350	1.81
船浦地域	5.15	10.81	42.54	41.50	6,620	2.98
〃	4.14	4.86	45.14	45.86	7,390	5.44

現在、発熱量はジュールという単位で表されます。

1キロカロリー ≒ 4.2キロジュール (kcal) (kJ)

## 西表島と他の炭鉱との違い

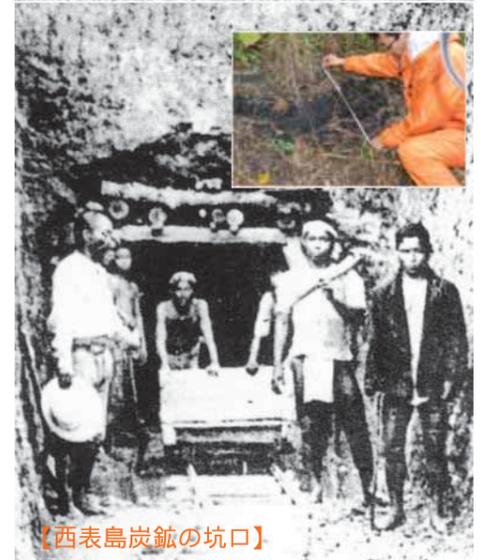
国内で石炭の産出量が多く、産業として発達した地域は北海道、常磐地域、九州北部などでした。こうした地域の炭層は、通常1～5メートルくらいの厚さで地中に広がっており、その場所全体を炭田(たんでん)と呼びます。炭層が厚い地域では、削岩機や火薬を使うことで効率よく採炭できるため、巨大な櫓(やぐら)や鉱業所が建設されるなど産業として発展しました。

これに対し、西表島の炭層は厚いところで一尺(約30cm)という薄い炭層でした(後で出てくる丸三炭坑宇多良炭業所では、厚さ二尺(約60cm)の炭層があったそうです)。そのため、石炭を掘るための穴(坑道)は主要なものでも高さが五尺六寸～六尺(160～180cm)、幅が九尺(約270cm)でした。そこにトロッコを乗せるレールが敷かれていました。

この薄い炭層から、坑夫たちは横になって採炭しました。石炭を掘る役割の「さき山」と、掘った石炭を坑外に出す「あと山」と呼ばれる西表島炭鉱の採炭方法は、タヌキ堀りと呼ばれる原始的な方法で、落盤(らくばん：壁がくずれること)による事故もしばしば起こったといわれています。



【筑豊炭田の炭鉱都市】



【西表島炭鉱の坑口】

## 西表島の炭鉱

### 近代化産業遺産群

幕末から昭和初期にかけての産業近代化の過程は、現代の「モノづくり大国・日本」の礎(いしずえ)としてだけでなく、各地域における今日の基幹産業(きかんさんぎょう：経済活動の基盤となる重要な産業)のルーツとして極めて大きな意義(いぎ：ことばによって表される意味、内容)を持っています。

近代化産業遺産は古さや希少さなど物理的な価値のほかに、国やその地域の発展にこれら遺産が果たしてきた

役割、産業近代化に関わった先人たちの努力など豊かな無形の価値を物語るものとして位置づけられます。

近代(幕末～昭和初期)の沖縄経済産業の発展に貢献したとして、西表島に今も残る炭鉱関連施設は、糸満市や北大東島などの黒糖産業関連施設とともに、2007年、経済産業省の「近代化産業遺産群33」に認定されました。この石炭と黒糖は2つの「黒いダイヤモンド」と呼ばれています。



【北大東島の高嶺製糖工場跡廃蜜タンク】

# 西表島炭鉱の歴史

## 1. 燃える石

むかし、成屋村(なりやむら)という小さな村で、村の少年がほうきで庭の落ち葉をかき集めたき火をしていました。その火にあたたまっているうちに、妙に鼻につくにおいがしました。変だな…、と思っていたら石垣の下積みになっている黒い石に火が燃え移っていることに気がつきました。

少年は驚いて「石垣が燃えている！」と父親を呼んできました。かけつけた父親も石垣が燃えているのを見て驚き、水をかけて消しとめました。それからこの黒い石は「燃える石」と呼ばれました。

これが言い伝えによる西表島の石炭発見ですが、いつの頃の話なのか定かではありません。

## 2. 鍛冶場(かじば)の石炭

14~15世紀ごろ、祖納(そない)の上村(ういむら)に大竹祖納堂儀佐(おおたけそのどうぎさ)という人が登場します。上村には今も大竹祖納堂儀佐の屋敷跡(やしきあと)や鍛冶場跡などの遺跡(いせき)が残っています。遺跡の南西にある斜面には、おびただしい量の鉄滓(てっさい：精錬時や鍛冶の際に鉄原料から出てくる不純物)と黒色土があり、この黒色土の中に石炭が含まれていました。



【祖納にある大竹祖納堂儀佐の屋敷跡】

鉄滓の成分を分析した結果、二酸化チタンとバナジウムという鉱物が含まれているため、砂鉄でなく鉄鉱石が原料であるとわかりました。しかし、西表島には鉄鉱石がありません。成分が揚子江流域(ようすこうりゅういき：揚子江という川の周辺)のものと似ていたため、中国大陆から台湾を経由して輸入されたのではないかと考えられています。



【鉄鉱石が輸入されたと思われる経路】

鉄鉱石と一緒に石炭も輸入されたのではないかと考えられますが、石炭は鉄を劣化させる硫黄(いおう)や燐(りん)を含んでいるため鍛冶に使用できません。鍛冶に使うことができない石炭を鉄鉱石とともに輸入するとは考えにくく、ひょっとするとこの石炭は西表島のものかもしれません。しかし、西表島の石炭なのかどうかは今のところ明らかになっていません。

## 3. 琉球王府のころ(採炭の前)

### ① 琉球王府とペリー艦隊

西表島の石炭には、18世紀末の八重山島諸記帳のなかに「燃石(ねんせき)」のことが書かれており、これが石炭であるとすれば、石炭発見の最初の「記録」となります。

ただ、1854年(嘉永7年)に琉球を訪れたペリー艦隊のR・G・ジョーンズが発見したとする説もあります。

1853年に米国東インド艦隊を率いたペリー一行は初めて琉球に寄港後、5度にわたって琉球を訪れています。彼らは石炭に強い関心を示し、R・G・ジョーンズたちが調査にあたりました。当時の艦船の積載能力を考えると、彼らは極東(きょくとう：ヨーロッパから見てもっとも東にある日本・中国・朝鮮半島などのこと)にどうしても石炭の採掘場を確保したかったのです。



【R・G・ジョーンズ一行の沖縄地質調査】

一方、琉球王府はこうしたペリー艦隊の一行が、琉球に石炭を求めようとしていることを警戒し、1854年、八重山の在藩(ざいはん：王府の出先機関)や地元の職頭に対し、石炭を隠すように指示しています。異国人に対して石炭のありかを教えてはならぬ—というのは、いわば琉球王府の国禁でした。

### ② 石炭加那事件(せきたんかなじけん)

ところが、この国禁を破る事件が起きました。石垣島の平民であった大浜加那(おおはまかな)は1872年(明治5年)、鹿児島島の汽船・海運丸の支配人であった林太助(はやしたすけ)に西表島の石炭の存在を教えたのです。大浜加那は王府の禁令を破った罪により、波照間島に10年の流罪(るざい：遠くに送る流放刑)となりました。これが後に「石炭加那事件」と呼ばれる事件です。

10年の流罪となった大浜加那は、刑に服すること6年にして、1879年の琉球処分(りゅうきゅうしよぶん：琉球藩を廃止し沖縄県をおいたこと)の特赦(とくしゃ：刑を免除すること)により帰ることができました。

## 3. 明治期 ~炭鉱創世時代~

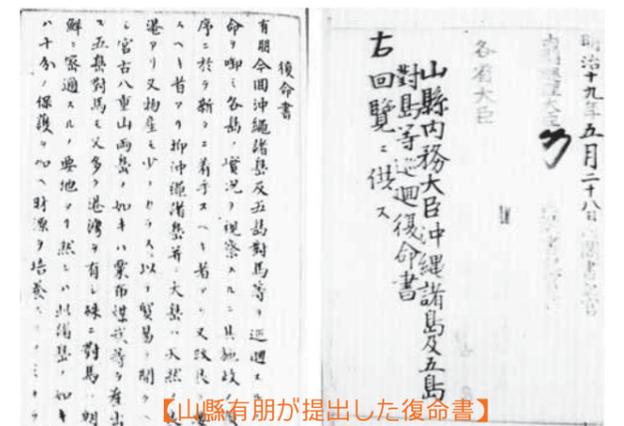
西表島において石炭が本格的に採掘されるようになったのは、「石炭加那事件」から十数年も後の1886年(明治19年)、三井物産会社によるものからでした。採掘開始から明治時代末期までの事業は、三井物産や大倉組などのような明治政府の御用資本(ごようしほん：政府など国のお金をもとにした会社経営)や、元琉球王家資本といった、明治政府の後押しによるものが特徴でした。

数百人規模で始まった三井物産の採掘には、沖縄県よりも他府県の人が多くいました。そうした人たちとは別に、沖縄県内の囚人も使われていました。明治政府の内務大臣であった山縣有朋(やまがたありとも)は、1886年に九州から奄美、沖縄、宮古、八重山と各地を巡視し、わざわざ西表島まで足をのばして三井物産の炭鉱を視察しました。

沖縄巡視からもどった山縣有朋は、沖縄県内の囚人に西表島で採炭させるよう書いた復命書(ふくめいしょ：上司への報告書)を明治政府に出しました。こうして西表島における囚人労働が始まりました。

賃金は、他府県人が一日働いて30銭なのに対して、沖縄人は3分の1の10銭という低賃金と、囚人労働という非人道的な労働形態によって採炭事業は開始されました。

採掘した石炭は、中国に近いという西表島の地の利を活かして福建や香港などに輸出されました。



【山縣有朋が提出した復命書】

1886年に開始された事業は、1889年9月に一部の坑夫が突然福岡県の三池炭坑(みいけたんこう)に引き揚げてしまい、中止に追い込まれました。その最大の理由はマラリアでした。1886年6月からの半年間でマラリアにかかった坑夫は150人中144人で、このうち14人が死亡しました。囚人にいたっては同じ期間に33人、翌年7月から11月までに27人が死亡、一ヵ月に5、6人が死亡するありさまでした。

こうして明治政府の後押しで採掘を始めた三井物産の採炭事業は、明治20年代の半ばに終わりました。

### ① 成屋(なりや)

内離島(うちばなりしま)にあった成屋は明治・大正の頃うたわれた「八重山数え歌」に登場するほど、かつてはにぎわっていました。西表島で採掘を始めた三井物産は、この成屋において開坑(かいこう：新しく坑道を開くこと)、採炭を始めた以後、この一帯は明治・大正期の西表島炭鉱の主舞台となりました。

三井物産が明治20年代の半ばに採炭を中止した後、三井の代理人であった三谷伊兵衛(みつやいへえ)が借区し採炭していたため、成屋は「三谷(みつや)」と呼ばれたこともありました。



【内離島にあった成屋】



### ② 元成屋(もとなりや)

西表島の白浜から船で船浮に向かう途中、西表島と内離島に挟まれた水道がありますが、その水道を左手に進むと島から突き出した突堤のような岩礁があります。これが元成屋の貯炭場(ちよたんば：石炭をためるところ)跡です。

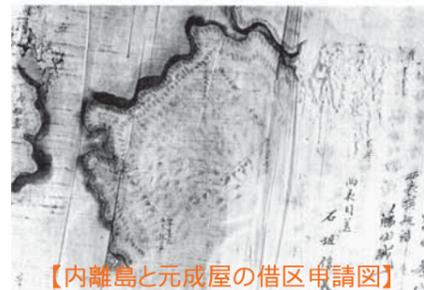
元成屋の炭鉱は、西表島炭鉱の中で最も初期の頃に手が付けられました。1885年(明治18年)に三井物産が試掘(しくつ：試しに掘ること)を行い、借区申請(しゃくくしんせい：土地を借りるための申請)を出したのも成屋とこの元成屋一帯でした。

三井物産の後を受けて、八重山炭鉱(やえやまたんこう)によって採炭が続けられました。貯炭場には山からレールがひかれ、元成屋の坑口から石炭が運び出されていました。

白浜から元成屋の前を通りすぎて、左手にまわったところに長い砂浜があります。ここにはコークス用の木炭を焼くかまがあったため「木炭」という地名で呼ばれていました。



【元成屋の貯炭場】



【内離島と元成屋の借区申請図】

### ③ 南風坂(はいさか)

かつて内離島の東端に何十戸もの家が並び、郵便局まであった炭鉱の場所が南風坂でした。1895年(明治28年)、政商・大倉喜八郎(おおくらきはちろう)の経営する大倉組が、この南風坂一帯で開坑しました。事務員、坑夫を合わせて1,200人という労働者を使い、大々的に採炭に乗り出しましたが、明治30年代の半ばには事業中止となりました。



【壊れたビール瓶】

この大倉組が手を引いた後、1901年(明治34年)には沖縄広運(おきなわこうん)が貯炭400万斤を引き受けて採炭に乗り出しました。この会社は旧藩時代、内務省から下賜(かし：与えること)された郵便船「大有丸」をもとに、1887年(明治20年)頃、旧琉球王朝家資本を中心に設立された会社でした。

沖縄広運は坑夫、事務員合わせて約500人を使い採炭しましたが、長くは続かず1907年(明治40年)に事業を中止しました。

### コラム -西表島の石炭はどこへ運ばれた?-

西表島で採炭された石炭は、那覇や大阪などの国内だけでなく、高雄(台湾)や香港の他、上海や広東など中国本土にも輸出されていました。これだけ需要があった石炭は、人々の生活に欠かせないものだったことを物語っています。



### 4. 大正期 ~炭鉱全盛時代~

大正期に入ると西表島の炭鉱は、第一次世界大戦と国内の重工業化時代を反映して石炭の需要が増大し、全盛期を迎えました。1908年(明治41年)の八重山炭鉱をはじめ、沖縄炭鉱、琉球炭鉱、先島炭鉱、共立炭鉱、高崎炭鉱といった大小炭鉱会社が採炭に乗り出し、西表島の炭鉱はにぎわいをみせてきました。なかでも八重山炭鉱、沖縄炭鉱、琉球炭鉱は大正末の“三大炭鉱”としてその規模の大きさを誇っていました。

八重山炭鉱は1906年(明治39年)に設立された会社で、採炭にとりかかった1908年から数年間は、マラリアや台風のため事業は思うようにはかどらず、欠損(けっそん：赤字と同じ)に欠損を重ねていました。それが第一次世界大戦後の好景気により、事業は軌道に乗りました。働いていた坑夫の総数は864人で、その出身地は沖縄県人470人、他府県人212人、中国人28人でした。坑夫の家族まで加えると総数は1,100人を数えたといわれています。



【大正初期の那覇にあった八重山炭鉱の事務所】

西表島炭鉱の全盛期であった大正期における坑夫の生活はどうだったのでしょうか。

この頃の西表島には、中国大陸からたくさん花瓶や大皿などの陶器(とうき)や磁器(じき)がもたらされました。その中には見事なものもあったといわれています。今も内離島の北側にある砂浜では、割れた陶器や磁器の破片を見ることができます。

そうした華やかさが見られた一方で、西表島炭鉱の苛酷な労働からの逃亡は炭鉱の歴史が始まって以来、ずっと続いてきました。

炭鉱会社の“人繰り(ひとぐり)”と呼ばれた坑夫たちの労務管理者が、坑夫たちの生活をつぶさに監視していました。炭鉱のまわりは深いジャングルに囲まれ、その先は果てしなく海原(うなばら：広々とした海)が広がるいわば“自然の牢獄”です。

脱出に失敗すれば人繰りたちによるリンチが待ち、脱出できたとしても果てしない海とジャングルが待ち受けているとわかっているにもかかわらず、坑夫たちは命がけて脱出を試みました。

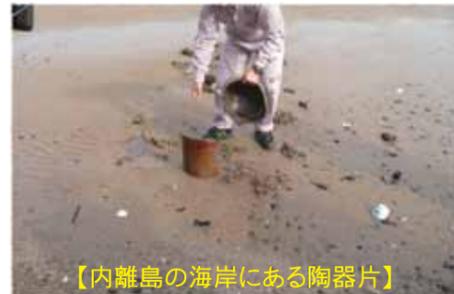
今も“生き地獄”からの脱出を試みた坑夫たちの思いと白骨は、西表島のどこかに眠っているのです。



【大正期の坑夫たち】  
(座っているのが人繰りと思われる)



【大正期に中国大陸からきた花瓶や大皿】



【内離島の海岸にある陶器片】



【野ざらしにされた白骨】

## ① 大正期の成屋

三谷が成屋で採炭を中止した後、1916年(大正5年)、白浜に本部を置く西表炭鉱(いりおもてたんこう)が採炭を始めました。西表炭鉱は、1918年(大正7年)に沖縄炭鉱(おきなわたんこう)と社名を変え、成屋からさらに採炭場を浦内に拡大しました。

## ② 新坑(しんこう)

八重山炭鉱が1921年(大正10年)に採炭事業を中止したあと、事業を引き継いだ琉球炭鉱が内離島で採炭事業を始めました。

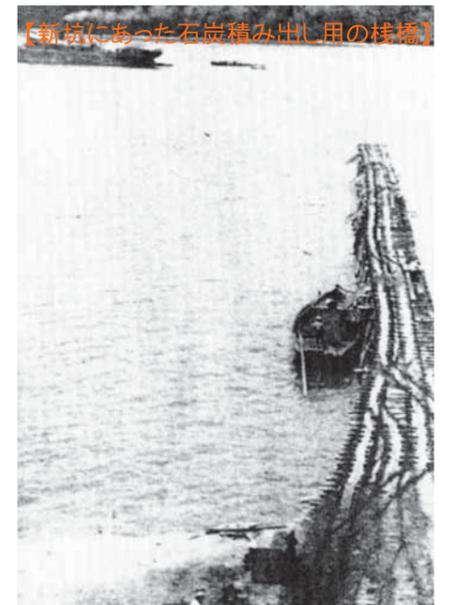
この坑は、琉球炭鉱の鉱主・河野吉次(かわのよしつぐ)が新しく開坑したところから「新坑」と呼ばれ、大正末から昭和の初め頃にかけて最もにぎわいをみせました。かつてこの炭鉱村にいた人の話によると、村には十数軒の炭鉱納屋があり、山の神をまつた祠(ほこら)やお寺もあったそうです。



【琉球炭鉱の納屋】



【新城にあった炭鉱村】



【新坑にあった石炭積み出し用の棧橋】

山すそに大小の家が軒を並べ、その庭先から海辺に向けていくつもの棧橋のようなものがあり、これは天然の水洗便所でした。それがあたかも西表島炭鉱の風物詩(ふうぶつし：季節や場所などを特徴づけるもの)のようにさえなっていました。大きな棧橋には石炭をダンベー船(だんべーせん：石炭を運ぶ船)まで運ぶトロッコのレールが走っていました。

大正末から昭和の初めにかけて、星岡炭鉱、共立炭鉱、高崎炭鉱などが分離し独立しましたが、規模はいずれも200人前後の坑夫をかかえたもので、いわゆる“斤先(きんさき)”といわれる下請(したうけ：ある人や会社などの仕事の全部または一部を引き受けてすること)にあっていたものです。

この頃の炭鉱経営者は明治期の御用資本とは異なり、民間の中小資本や納屋頭(なやがしら)などが人間関係を巧みに利用してのしあがったというのが特徴的でした。

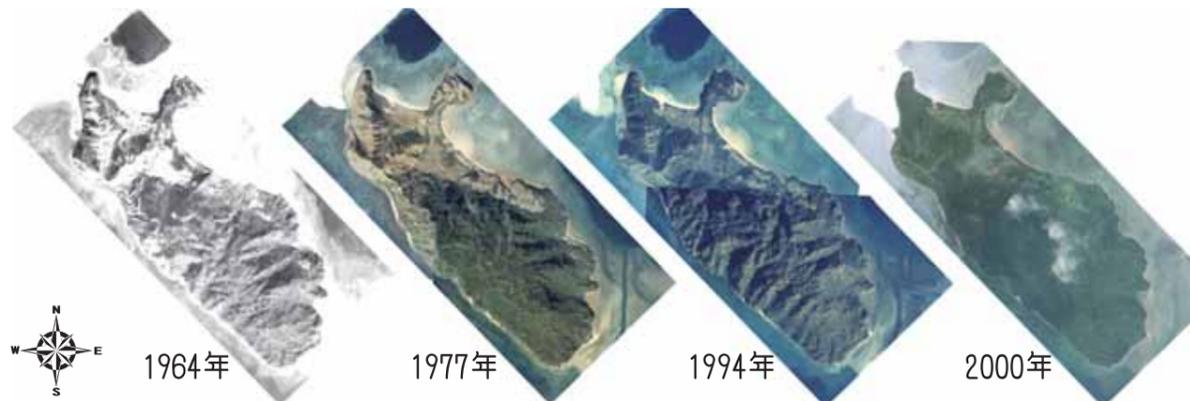
大正期の“繁栄”の一面で、西表島炭鉱では大正期に始まったといわれる労働者の納屋制度(なやせいど：納屋頭が作業の割り当てや現場監督などのほか、ここでは坑夫の生活管理まで行っていた)により、坑夫の逃亡防止までを納屋頭が行い、常に厳しい管理のもとで坑夫たちは強制労働を強いられていたのです。

## コラム -内離島(うちばなりしま)の様変わり-

西表島でもっとも炭層が発達していたのは内離島でした。西表島炭鉱の歴史のなかで、この島では初期から最期まで採炭が行われました。

採炭が終わってから50年、その後の内離島はどのように変わってきたのでしょうか。

下の写真は1964年(昭和39年)、1977年(昭和52年)、1994年(平成6年)、2000年(平成12年)に撮影された空中写真です。写真がカラーとなった1977年の写真を見ると、成屋(なりや)があった島の北部を中心に木のないうちがみられます。これは、戦時中に軍の施設をつくったり、戦後に牧場を作るため木を伐採したりしたためです。1994年になると緑色の部分が徐々に増え、2000年にはほとんど樹木でおおわれています。ジャングルにおおわれた炭鉱関連施設は、西表島炭鉱の記憶と共に埋もれようとしているのです。



1964年

1977年

1994年

2000年

### コラム -内離島・外離島の炭鉱関連図-

西表島の炭鉱を調査していた向野泰祐(こうのたいすけ)氏が作成した炭鉱関連図を見ると、内離島にはたくさん坑口が開けられていたことがわかります。

これらの坑口や施設は、時代とともにくずれたりジャングルにおおわれ、確認できるものは多くありません。一〜八坑のうち、五坑を除く坑口は現在見る事ができません。

こうした記録が残っているからこそ、この西表島で繰り広げられた歴史を現代の我々は見つめ直すことができるのです。



### ③ 五坑(ごこう)

内離島は炭層の最も発達した島です。終戦までの60年以上にわたった採炭の歴史の中で、この島は蜂の巣のように坑道があげられ、島の南側の船浮湾に面した山の斜面には、採掘した順に一坑、二坑、三坑…と番号が付けられていました。坑道のほとんどは残っておらず、わずかに五坑の坑道と、立坑ゲージ、貯炭場の跡が往時(おうじ：過ぎさった時代)の姿をとどめており、坑道の中にはツルハシの跡が今も生々しく残っています。

五坑の近くには、小さな納屋(なや：寝泊まりするための小屋)が15〜16軒、それに独身者たちの入る大きな納屋がありました。

坑夫たちは、沖縄の山原(やんばる)方面から、鹿児島や福岡、さらに台湾からも来ていたようです。

こうして一〜八までの番号がついた内離島の坑道ですが、いつ、どういった会社が採炭を行っていたのかはよくわかりません。



【五坑の立坑ゲージ】



### コラム -ペンギムヌ-

島の人たちは、炭鉱を抜けてきた人たちのことを「炭鉱ペンギムヌ」と呼んでいました。ペンギムヌとは、土地の言葉で逃亡者のことでした。「炭鉱ペンギムヌ」ということばが熟語になるほど、炭鉱を逃げ出してきた坑夫のことは島の人たちに知れわたっていました。ある日、小浜島を目指してヨナラ水道(よならみどろ)を泳いで来る二つの人影がありました。救助された二人は台湾人坑夫でした。二人はしばらく細崎のカツオ節工場にいましたが、追っ手をおそれ小浜島の中央にある村に去って行きました。数日後に炭鉱会社の追っ手が現れ二人を捜し出し、再び西表島の炭鉱に連れ戻しました。その後、二人がどうなったか…誰にもわかりません。

## 5. 昭和期 ~戦時体制時代~

昭和期に入ると西表島の炭鉱は昭和初期の大恐慌(1929年：昭和4年)で一時不振をみたものの、1931年(昭和6年)年の満州事変、1937年の日華事変を経る中で再び活況を呈し、日米開戦前(1940年頃)にピークとなりました。しかし、石炭の生産体制は国内外の状況を反映して、戦時体制(せんじたいせい：戦争のために統制された国内の非常体制)へと移って行きました。特に石炭産業は各種産業の基礎的原動力として、産

業一般の興廃(こうはい：盛んになることと、すたれること)を決定するという見方から、石炭鉱業をあげて増産態勢がしかれました。

炭価(たんか：石炭の価格)は5倍に跳ね上がり、大小10カ所の炭鉱が盛んに採炭を行いました。主な炭鉱会社をみると、大正期の琉球炭鉱、沖縄炭鉱などを主軸とする時代から、昭和の南海炭鉱、丸三炭坑、星岡炭鉱を主軸とする時代へと移って行きました。

しかし、戦時体制の強化は鉱山用機械の入手が困難になり、坑夫が軍夫として召集されることによる労働力の不足という事態をまねき、その解決策は坑夫の労働強化という形で現れました。その内容は禁止していた坑夫の深夜労働、就労時間の延長、少年坑夫の使用、婦人労働者の坑内労働などです。

### ① 昭和期の成屋

昭和に入ってから、南海炭鉱(なんかいたんこう)に吸収された中小炭鉱が成屋で採炭を続けていました。しかし、大正期のようにぎわいが見られることはありませんでした。

成屋の近くには、台湾人の納屋頭(なやがしら)であった陳養生(ちんようせい)が、散乱する白骨を見かね、骨を集めて建立したといわれる「萬魂碑(ばんこんひ)」が現在もあります。

### ② 宇多良(うたら)

浦内川の支流である

宇多良川の上流部には数百人規模が働く一大炭鉱村が存在していました。

丸三炭坑宇多良鉱業所(通称：宇多良炭坑)

――昭和の十年代に隆盛(りゅうせい：勢いが盛なこと)を極めた炭鉱でした。鉱主の野田小市郎(のだこいちろう)は、高崎炭鉱という1925年(大正14年)に仲良川畔の俗に二番川といわれる場所で採炭していました。

1933年(昭和8年)、丸三合名会社に改めて積極的に事業拡張に乗り出しました。なかでもこの年に宇多良で発見された炭層は、丸三炭坑を一躍、西表一の大炭鉱にのしあげました。

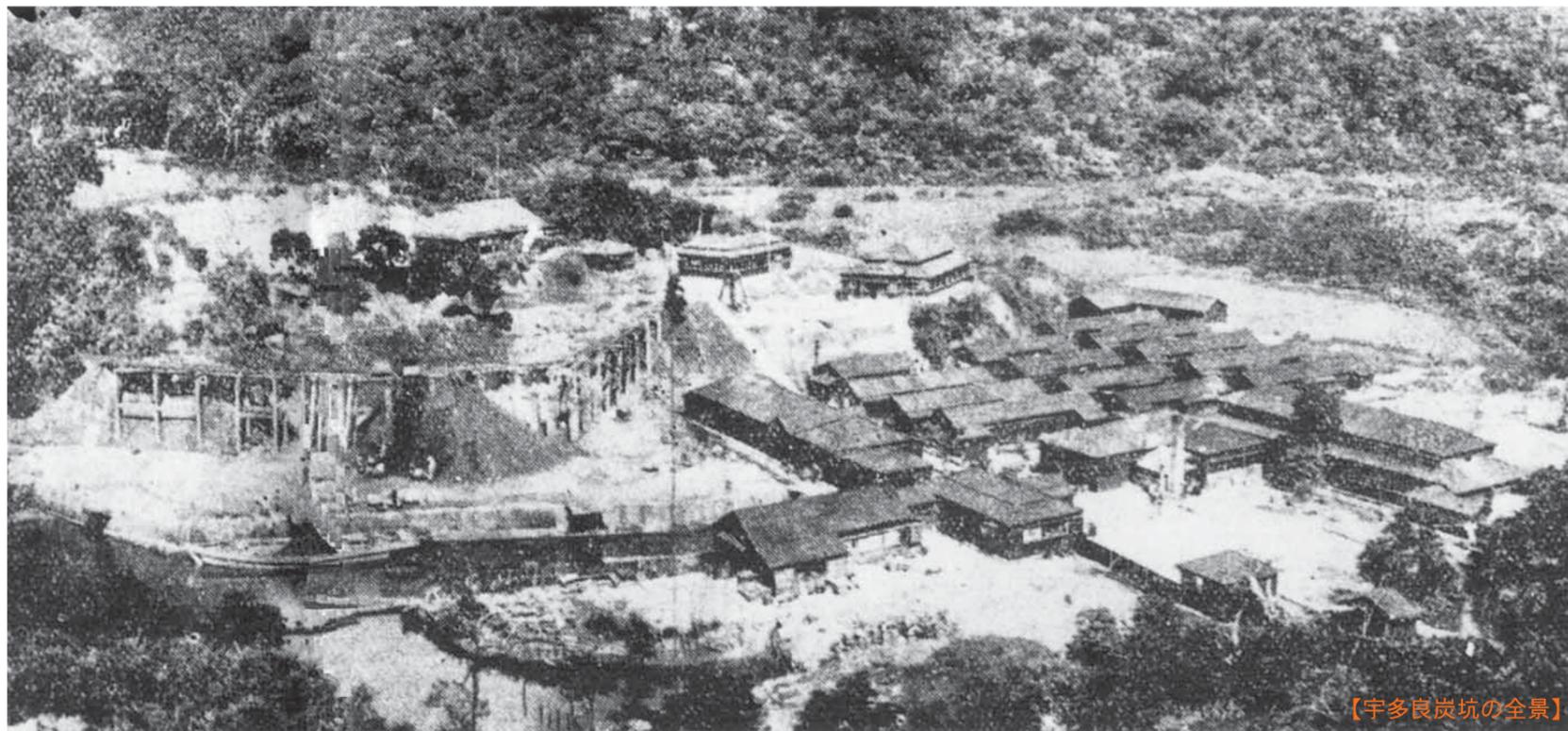
宇多良川沿いのジャングルには、独身者や家族たちの納屋が幾棟も建ち、集会所や医務室もつくられた村がこつ然と現れました。



### コラム -三つの碑-



西表島には、現在三つの碑があります。内離島(うちばなりしま)の成屋村の近くにある「萬魂碑(ばんこんひ)」と南風坂(はいさか)にある「供養塔(くようとう)」は、いずれも西表島炭鉱の当時の鉱主が建立したものです。これに対し、丸三炭坑(まるさんたんこう)宇多良鉱業所の「萬魂碑(ばんこつひ)」は、2010年4月、萬魂碑建立期成会により建立されたものです。これらの碑は日本の近代化に貢献し、西表島の地で犠牲になった人たちの霊を弔うものです。



【宇多良炭坑の全景】

### コラム -宇多良炭坑全図-

宇多良炭坑の発見と建設にたずさわった人に、佐藤金市(さとうきんいち)さんという人がいました。

佐藤さんは木挽き(こびき：大きなノコギリで丸太を材木にする職業)として宇多良炭坑で働いていました。その佐藤さんが晩年(ばんねん：年老いてからの時期)に描いたのが宇多良炭坑全図です。この図と宇多良炭坑の全景写真を見くらべると、芝居小屋や“野田御殿(のだごてん)”と呼ばれた丸三炭坑の鉱主・野田小市郎の住居がどこにあったのかよくわかります。

前のコラムで紹介した向野泰佑氏が作成した「内離島・外離島の炭鉱関連図」とともに記録し残しておくことの大切さが実感できます。



### コラム -坑夫たちの娯楽-

坑夫たちの苛酷な労働は終戦直前の事業停止となるまで続きましたが、昭和10年代以降になるとさすがに炭鉱会社側も坑夫の不満を解消するための娯楽施設の必要性を認め、その設置にとり組みました。

宇多良炭坑の鉱主・野田小市郎は、300人が収容できる劇場を建て演劇などを開催しました。演劇といっても坑夫たちが演じる素人芝居で、月に2~3回ほど催していました。当時使われた芝居用の“かつら”が今も西表島の干立公民館に残っています。

演劇のほか、1937年頃には八重山を舞台にした無声映画「オヤケ・アカハチ」が上映されました。この映画は14世紀末の石垣島の英雄オヤケ・アカハチを描いた石垣島出身の詩人・伊波南哲(いばなんてつ)の原作で、当時、話題となった作品でした。映画が宇多良炭坑で上映されたとき、炭鉱の住人ばかりでなく近隣の村人たちもわざわざ観にきたといわれています。



【上演された演劇のようす】



【干立公民館に残るかつら】

宇多良炭坑は“スマートな近代的設備と保健衛生によるマラリアの撲滅(ほくめつ：なくしてしまうこと)や他の風土病の根絶を期した設備によって、従来の不名誉を回復し面目一新(めんもくいっしん：世の中の評判が一新して、それまでとは違う高い評価を得ること)されるに至った”と新聞で紹介されるほどでした。

野田小市郎は300人も収容できる劇場を作り、ここで映写会をしたり月に2、3回は素人芝居も行うなど坑夫の娯楽に気を配っていました。しかし、表向きの立派さに比べ坑夫の納屋はお粗末なものでした。

近代施設を誇り、桃源郷(とうげんきょう：世間からはなれた理想の世界)とまでいわれた宇多良炭坑でしたが、戦時下の増産体制強化のもと、採炭全盛の頃は過酷な労働が強いられ、坑夫たちからは“压制炭鉱(あっせいたんこう：強制的に炭鉱労働をさせる)”としておそれられました。南海炭鉱と合流したあと、1941年(昭和16年)の後半から翌年頃にかけて、坑夫が軍夫として徴用(ちょうよう：強制的に動員し働かせること)されるようになってから急速におとろえ、1943年頃には事業停止に追い込まれました。

【宇多良炭坑の貯炭場】



【宇多良炭坑の貯炭場】



### コラム -逃亡少年坑夫との再会-

大阪で暮らしていた谷内政広(たにうちまさひろ)さんは、1943年16歳のときに宇多良炭坑へきました。一杯のおかゆで強制労働…同僚坑夫にも栄養失調とマラリアで死ぬものが出ました。

このままでは死ぬ、と思った16歳の少年坑夫は、その日から逃亡のチャンス待ちました。逃亡の道はただ一つ…、野菜などを売りに来る島の舟(サバニ)に乗せてもらうしかない…。先輩坑夫がカマス(南京袋)に少年を押し込み、荷物に見せかけ舟に乗せてくれました。検査のため監視人が鉄の棒で次々に荷物を突くのですが、鉄の棒は少年の入った袋を素通りしました…。少年は救出されたのです。

それから三十数年後、死んでいった同僚坑夫や自分を救出してくれた命の恩人のことが忘れられなかった谷内さんは、いつか西表島の炭鉱跡を訪ね、同僚の霊を弔いたいと思っていました。

1977年8月、その願いをかなえる時が訪れました。

谷内少年を救出したのは、石垣島で余生を送っていた大井兼雄(おおいかねお)さんだということがわかったのです。

三十数年ぶりに大井さんと劇的な再会を果たした谷内さんは、自分たちが働いていた宇多良炭坑跡を訪れました。同僚たちが埋められたと思われる場所に墓石をたて、谷内さんは大阪でテーブルコーダーに吹き込んだお経を流しました。谷内さんは同僚たちの眠る炭鉱跡の土とともに大阪へと帰っていきました。このことは新聞でも報じられました。

その後、谷内さんを救出したのは実は自分ではないと大井さん本人がうち明けてくれました。無念の死をとげていった元同僚たちの霊を弔うため、長く重い戦後を経て西表島の地を訪れた谷内さんを思い、大井さんは救出した人の代わりに演じたのです。



【新谷内さんと大井さん】

### コラム -炭鉱からの大脱走-

きびしい監視の目で脱出をゆるさない西表島の炭鉱でしたが、一度に200人以上の坑夫が逃げ出した事件がありました。

事件の発端(ほんたん：事の始まり)は、鳩間島に逃げ込んだ坑夫を探しにきた炭鉱会社の人繰りが、間違っ鳩間島の住民をこん棒でなぐりとばしたことにありました。人違いだと知って人繰りはあわてて逃げようとしたのですが、駆けつけた島民に取りおさえられ袋だたきあい、炭鉱に追い返されました。

これを聞いた鉱主の河野吉次は怒り、鳩間島の漁船をダイナマイトで破壊しました。これを知った鳩間島の漁民が怒り、船に漁民や住民が乗り込んで炭鉱を襲撃し、ダイナマイト倉庫を爆破して坑夫の大半を連れて帰りました。

河野は警察を連れて鳩間島に押しかけましたが、既に坑夫213人を乗せた船は那覇に向け出たあとでした。

西表島の炭鉱がどんなどころかをよく知っていた鳩間島の漁民の心意気が、前代未聞の集団逃亡を成功に導いたのでした。

### ③ 西表島炭鉱の統合

1886(明治19年)年の三井物産の採炭以来、西表島には大小さまざまな炭鉱ができてはつぶれ、つぶれてはできてきました。

1936年(昭和11年)に星岡鉱業所と河野合名会社が合併し、資本金300万の南海炭鉱(なんかいたんこう)が設立されました。この会社は東海セメントの山内卓郎(やまのうちたくお)が社長となって設立し、本社を名古屋、鉱業所を西表島、出張所を那覇においていました。

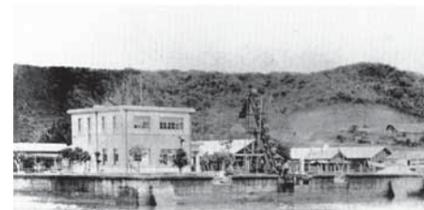
南海炭鉱は1937年に丸三炭坑とも合流し、文字通り西表島の炭鉱を統合しました。

山内卓郎は、なぜ西表島炭鉱にまで手を伸ばしてきたのでしょうか。それは、良質の石炭によるセメント用の燃料を確保し、本業であるセメント事業の原価引き下げが目的でした。こうした経営方針のもと、石炭の増産がすすめられたため、一方では坑夫たちの強制的な労働が行われました。

1939年(昭和14年)5月6日、南海炭鉱の吉沢坑で起きた白昼殺人事件は、その労働実態を白日のもとにさらけ出しました。事件というのは、坑夫4人が休憩中の坑内労働係をツルハシで殺害したというものでした。

かけつけた八重山署の巡査によって四人のうち三人は逮捕されましたが、残る一人は逃走し、後日、内離島の山で死体となって発見されました。

この事件をきっかけに、改めて坑夫の待遇が問題となり、八重山署は巡査部長を西表島に派遣し、鉱主を集めて協議しました。しかし、やがて戦争となり、これもうやむやになっていきました。



【白浜にあった南海炭鉱の事務所】

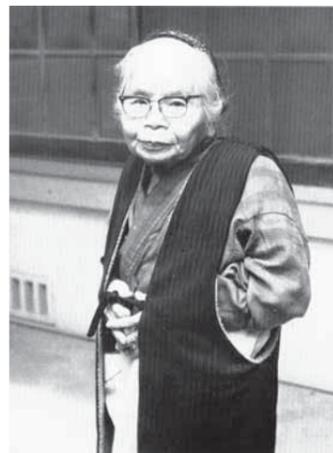
### コラム -四つの私立学校-

学校は祖納や網取の村にはありましたが、坑夫の多い白浜や内離島にはありませんでした。そこで鉱主たちは、子どもたちのために私立学校を建てました。

一つは南風坂炭坑(内離島)の南風坂小学校、二つ目が私立琉球炭鉱尋常小学校、三つ目は丸三炭坑が仲良川支流のアダナテ川(通称二番川)河畔(かはん：川のそば)にたて、のちに浦内に復活させたたみどり学園、そして四つ目が白浜で南海炭鉱がたてた白浜仮教場でした。これら四つの私立学校のうち、内離島にあった二つの学校は廃校となりましたが、みどり学園は後の上原小中学校に、白浜仮教場は白浜小中学校へと引き継がれていきました。

白浜仮教場に赴任し、14年間教鞭をとった(きょうべんをとる：教師になって生徒に教えること)女性教師が安座間(旧姓・与儀)幸子さんでした。

白浜小中学校は独立した1956年7月、長きにわたり恵まれない教育環境の中で、白浜の子どもたちのため教育者として教鞭をとった安座間さんに感謝状を贈りました。



### 6. 戦後の米軍統治時代

敗戦はすべてのものを変えました。西表島炭鉱の歴史もひとまずその歴史に区切りをつけました。戦前の各炭鉱は数例を除くと鉱主や坑夫らがほとんど散り散りとなったためでした。

しかし、西表島の新たな統治者となった米軍は、早くも西表島の石炭に目をつけ、採炭に着手しました。こうした地下資源に対する米国のすばやい対応は、100年前のペリー艦隊を思い起こさせます。

米軍による採炭は、1948(昭和23年)年から52年までおよそ5年続き、その後は民間に払い下げられて採掘されていました。しかし、1960年代にはすべての活動を停止、名実ともに西表島炭鉱の採炭の歴史に終止符が打たれました。1960年に日米両国政府による西表島の総合開発構想が打ち上げられ、石炭の調査も行われたものの、総合開発構想そのものが実を結ぶことはありませんでした。

#### ① 上原・中野(ういばる・なかの)

1948年(昭和23年)、米軍によって開設された上原採炭所は1950年に琉球興発が譲り受けました。しかし、これもわずか2年ほどで事業中止になり、このあと松山鉱業所が事業を引継ぎ、八重山群島内や沖縄本島の酒屋、カツオ節工場の燃料用として細々と採炭していました。

中野にあるわいわいホール周辺と六つの坑道があることから六坑山と呼ばれる場所には、現在も坑口を見ることができます。そこで見られた炭層はいずれも薄く、厚さは30cmほどでした。



【中野の坑道跡】



【六坑山】

#### ② 内離島(うちばなりしま)

かつて坑口が無数に開けられた内離島では、星岡鉱業所と屋良石炭鉱業が10人前後の坑夫を使って細々と採炭を行っていたに過ぎませんでした。

#### ③ 外離島(ふかばなりしま)

外離島では、琉球鉱業による斜坑の試掘が行われた程度のようなのでした。



【内離島の星岡鉱業所】



【外離島の琉球鉱業】

約80年にわたり、過酷な労働とマラリアに悩まされ続けた西表島の炭鉱は終えんを迎えました。

# 圧制炭鉱 ～なぜ闇の歴史の舞台となったのか～

西表島の炭鉱はその苛酷な労働と待遇(たいぐう：働く人などのあつかい)で“圧制炭鉱”としておそれられました。こうした労働・待遇となった原因は何だったのでしょうか。

## 1. 募集人の甘言(かんげん：甘い言葉)

西表島の炭鉱で働いていた坑夫の多くは、全国から募集人によって集められました。西表島に送りこまれた人の多くは、賃金が内地の1.5倍で、西表島はあたたかく着るものをそろえる必要がなく、寝具(しんぐ：ふとんなど)は行った先の炭鉱会社が用意してくれるといった募集人の話を信じてしまいました。

西表島に着くころには船賃、食費、衣服費さらには幹旋料(あさせんりょう：間をうまくとりもつためのお金)までが坑夫の借金となっていました。つまり、坑夫たちが西表島に降りたったときには、すでに多額の借金を背負い込まされ、しかも、募集人が言っていたふとんや蚊帳(かや：蚊や害虫を防ぐため四隅をつって寝床をおおう網)などはありませんでした。

坑夫たちはまずこの借金を支払うために、その地を離れることができない仕組みにおかれたのです。



## 2. マラリア

西表島はマラリアの有病地でした。そのため西表島における炭鉱の歴史は、マラリアに悩まされ続けた歴史でもありました。

マラリアは力の一種であるハマダラカを介して、マラリア原虫という病原体に感染することで発症する伝染病です。症状は発熱、倦怠感(けんたいかん：だるさ)、頭痛、筋肉痛、関節痛などがあります。感染後、早めに適切な治療をしないと短期間で重症化あるいは死にいたる危険性があります。

西表島の炭鉱ではマラリアが原因となり、事業中止に追い込まれた会社もありました。昭和に入りマラリア感染の撲滅を目指した炭鉱会社もありましたが、それまでは坑夫の生活・労働環境においてマラリアに対する配慮が必ずしも払われていたとはいえ、感染・死亡する坑夫は多数にのぼりました。明治の一時期には、10人中9人がマラリア患者であったこともあるようです。八重山のマラリアが撲滅され世界保健機構(WHO)による無病地宣言が行われたのは、西表島の炭鉱が幕をおろす直前の1961年(昭和36年)のことでした。

## 3. 納屋制度

西表島の炭鉱で「納屋制度」と呼ばれる炭鉱特有の制度が定着したのは、大正期といわれています。納屋制度とは、納屋頭の下に坑夫を配し、納屋頭が坑夫の雇い入れから身上保証、作業の割り当て、現場監督、そして鉱主から一括してもらった賃金の給付などを取り扱う仕組みです。

西表島炭鉱では鉱主からの労務の請負(うけおい：賃金を取り決めた上で仕事を引き受けること)にとどまらず、坑夫の生活管理と何より坑夫の逃亡防止に当たっていました。つまり、納屋制度は坑夫に支払う賃金を含めたほとんどを管理し、坑夫から自由を奪って苛酷な労働をさせるための制度といえます。

## 4. 坑夫の仕事

西表島炭鉱の坑夫の労働はどのようなものだったのでしょうか。ひと口に坑夫といってもその仕事の種類はさまざまで、西表島炭鉱の場合は大きく分けると採炭夫、運炭夫、仕繰夫、雑夫でした。

賃金は仕事の種類により異なっており、危険度の高い仕繰夫が日額1円25-26銭で最も高く、ついで力が必要な運炭夫が1円20銭前後、採炭夫が1円15-16銭、フ口焚きなど簡単な仕事の雑夫が1円前後でした。もちろん賃金は仕事の習熟度(しゅうじゅくど：仕事になれている度合い)や技術などによっても左右されましたが、もっと賃金を左右したのは炭層の厚薄(こうはく：あついこととうすいこと)でした。

厚い炭層では作業能率があがりますが、薄い炭層と坑道も狭くなり作業能率が低下して賃金も少なくなりま。薄い炭層のおかげで少なくなる賃金を補うため坑夫は長時間の労働に走り、これが坑夫自身の健康を損ねる原因となりました。

病気になると治療費がかかるだけでなく労働時間が短くなり、さらに賃金が少なくなるためムリをして体調をくずす……という悪循環になり、坑夫の生活はどんどん苦しくなっていたのです。

職種	仕事の内容	賃金(日額)
採炭夫	石炭を掘る	1円15-16銭
運炭夫	石炭を運ぶ	1円20銭前後
仕繰夫	主に掘り進んだ坑道の維持と補修を行う	1円25-26銭
雑夫	フ口焚き、炊事、選炭(せんたん：石炭をよりわけること)	1円前後

## 5. 炭鉱切符

納屋制度の暴力的なシステムに加え、さらに坑夫をしばり付けたのは「炭鉱切符」と呼ばれた金券でした。炭鉱切符は炭鉱会社が紙幣(しへい：お札のこと)に似せて発行したもので、お金と同じ機能をもっていました。坑夫たちはこれを賃金として受け取り、会社の直売店から日用品などを購入しました。

炭鉱切符は発行した会社の売店でしか使うことができないので、会社側にしてみれば、一度支払った賃金が回収できるという利点がありました。つまり、たくさん切符を発行して坑夫に賃金を支払うことで、本物のお金が少なくてもなくとも事業ができたのです。

また、会社の売店以外では使えないので、坑夫は切符を持って逃げても使うことができないため、逃亡防止の役割も果たしていました。むしろ会社側は逃亡防止の役割を重視(じゅうし：重要なものとして注目すること)していたと考えられます。

切符を貯金代わりにためていたのに、会社がつぶれただの紙切れ同然となり、泣くに泣けない坑夫もいました。



## 6. リンチ

坑夫たちは高いところに小さな窓があるまるで独房(どくぼう：刑務所や拘置所で収容者を一人だけ入れておくところ)のような形をした長屋(ながや：細長い形の家)に、数十人が暮らしていました。その入り口には人繰りと呼ばれる現場の労務管理者が四六時中目を光らせていました。

こうした長屋生活や苛酷な労働にたえきれず逃亡を企てた坑夫が捕らえられると、棒やムチなどによるリンチが行われました。これは逃亡に失敗し、捕らえられるとこういうことになる、という他の坑夫たち

への見せしめの意味もありました。こうしたリンチにより、時には死亡する坑夫もいました。

捕らえられればリンチを受け殺されるかもしれないとわかっているにもかかわらず、命をかけた坑夫たちの逃亡は繰り返されました。炭鉱から逃れるため学校の物置小屋に放火し、自首するものもいました。一生出られることはない炭鉱にいるよりも、刑期を終えれば外に出られる牢獄(ろうごく：ろう屋のこと)のほうが、まだましだったのです。

西表島の炭鉱社会がいかに厳しかったのかがわかります。



## 7. 八重山の人たちと炭鉱

八重山の人たちも炭鉱で苛酷な労働をさせられていたのでしょうか。

地元八重山の人で炭鉱に関係した人は事務員や直売所の職員、本船への石炭積み、野菜などをサバニ(島の小舟)に乗せ炭鉱へ売りに行く人などで、坑夫として働いていた人はほとんどいなかったようです。西表島の炭鉱に八重山の人が少ないのは、一つが炭鉱の様子を人づてに聞いていたこと、もう一つは植民地であった台湾が沖縄本島などに比べて近く、新たな夢を台湾に求めたためでした。

炭鉱の様子をしっている八重山の人たちは、炭鉱から逃げてきた人を“炭鉱ピングムヌ”と呼び助けることもしばしばありました。その一方で、石垣島あたりでは炭鉱ピングムヌは一種の罪人のようにおそれられていました。炭鉱ピングムヌが現れたと聞けば、村の人々は戸締まりを固め、男たちは漁業用のモリを手に“山狩り(やまがり：山中に逃げ込んだ犯罪者などを追って大勢でさがすこと)”に出かけました。

なぜここまで炭鉱ピングムヌがおそれられたのでしょうか。炭鉱ピングムヌは借金を抱えたうえで逃亡してくるため当然無一文(むいちもん：金銭をまったくもっていないこと)であり、食べるものも持っていません。生きるためにはやむを得ず盗みを働くことになります。こうした行動は島の人たちに同情されるどころか誤解を招き、炭鉱ピングムヌに対する偏見(へんけん：かたよった見方・考え方)をかえってふくらませてしまいました。そして、“山狩り”という異様な光景は「炭鉱はおそろしいところ」という印象をますます植え付けることになりました。



【炭鉱ピングムヌが逃げてきた大正期の石垣港】

## 8. 戦争

大正期に入ると西表島炭鉱は、第一次世界大戦1914~1918年(大正3~7年)と、日露戦争(1904~1905年：明治37~38年)以後の重工業化時代を反映して石炭の需要が増大し全盛期を迎えました。

その後、昭和初期の大恐慌で一時不振となりましたが、1931年(昭和6年)の満州事変、1932年の金輸出の再禁止を受けて、軍需産業と輸出産業により国内経済に活力を与え、石炭産業も好調に転じました。特に重工業の発展、新興化学工業の隆盛、海運界の好況などに支えられ驚異的な増加をみせました。

1937年に日中戦争が始まると経済体制は急速に戦時体制へと移り、石炭産業は各種産業の基礎的原動力として国の考えに沿うよう石炭統制がかけられました。さらに日中戦争の拡大と長期化に対応するため、日本国政府は1939年頃から“増産奨励金(しょうれいきん：国などが補助金を出すこと)”や“新坑開発奨励金”などを出し石炭の増産対策を行いました。国策(こくさく：国の政策)により石炭業界の総合的な運営体制ができたにもかかわらず、機械化の遅れや鋼材の不足が目立ちはじめました。この対応には、坑夫たちの強制労働による増産しかありませんでした。

西表島の炭鉱では、太平洋戦争が始まった1941年(昭和16年)以降から戦時色が濃くなってきました。同年には陸軍による船浮要塞の建設が始まり、西表島炭鉱の坑夫が駆り出されました。なかでも台湾人坑夫は多かったようです。

各炭鉱会社は、1943年頃からアメリカやイギリスの潜水艦が現れるようになって航路が不安定になり、台湾-沖縄間の定期航路や石炭運搬船の航行も減少したため、石炭の搬出(はんしゅつ：ものを運びだすこと)が困難となりました。戦争前には盛況(せいきょう：盛んなようす)だった西表島の炭鉱も、戦争の激化とともに中止され、敗戦とともに崩壊しました。

坑夫の多くは、敗戦後それぞれの故郷に引き揚げていきました。戦争という高い代償(だいしょう：別のもので埋め合わせること)によって、坑夫たちは圧制の労働から解放されたのです。

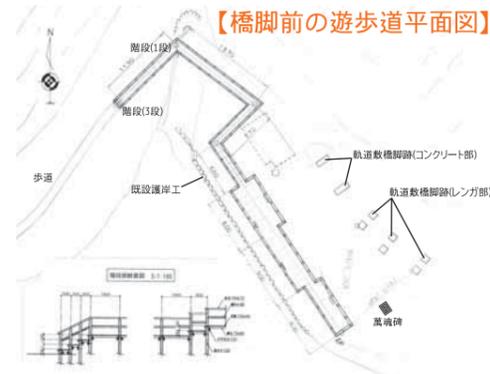
戦争が終わっても複雑な事情から故郷へ帰ることができず、西表島に残った人もいます。故郷の台湾をすて、永年住みなれた白浜に根をおろした楊添福(ようてんふく)さんもそのひとりです。その楊さんが西表島の炭鉱をかえりみた言葉が鋭く胸をうちます。

「異国の地で戦争と低賃金、いじめ苦しめられた同僚のことを思うと目がしらが熱くなり、戦争の罪深さをいやというほど思いしらされます。二度とこういう時代をつくってはならないと思います。」

### コラム -炭鉱関連施設の保全-

2010年3月、県道215号線の浦内橋付近から宇多良炭坑に続く林道が遊歩道として整備されました。その途中には木柵や雨水を流す横断溝、西表島の地質などを解説した案内板が設置されています。その遊歩道と接続するように、レンガとコンクリートでできたトロッコレールの橋脚の前には、炭鉱関連施設の保全と安全に見学することを目的としたテラス型の木製遊歩道ができました。遊歩道の設置と時を合わせるように、2010年4月にはこの地で無念の死をとげた坑夫たちの霊を弔う(とむらう)ための「萬骨碑」が建立されました。

こうした西表島炭鉱の歴史を物語る施設の保存に向けて、端緒を開く第一歩が踏みだされました。



# 外国人坑夫たち

西表島の炭鉱には、たくさんの外国人坑夫が働いていました。台湾人坑夫、朝鮮人坑夫、中国本土の坑夫たちでした。とりわけ、地理的に近い台湾からはたくさんの坑夫が来ていました。いつ頃から来ていたのか定かではないですが、明治30年代といわれています。

台湾人の多くは、基隆(キールン)やその近くの瑞芳(レイファン)あたりの採炭地で坑夫をしていた人たちでした。基隆が沖縄航路の港であったこともあり、西表島の炭鉱にわたってきた台湾人坑夫たちは、この地方の人たちが多かったようです。

台湾人坑夫に比べその数は少ないものの、大正期に入ってから朝鮮人坑夫もみられるようになりました。しかし、その正確な数はよくわかっていません。

日本の資本主義経済は、植民地にした国からの外国人労働者を踏み台に、繰り返し収奪(しゅうだつ：強制的に取り上げること)することで発展してきました。都合のよいときには外国人労働者を同じ“日本人”として酷使(こくし：きびしく使うこと)し、都合が悪くなると切り捨てるという差別的な扱いを平気で行ってきました。こうした行為は西表島の炭鉱だけであつた話ではありません。歴史の中にあるこうした事実を私たちは知っておく必要があります。

# 西表島の炭鉱年表

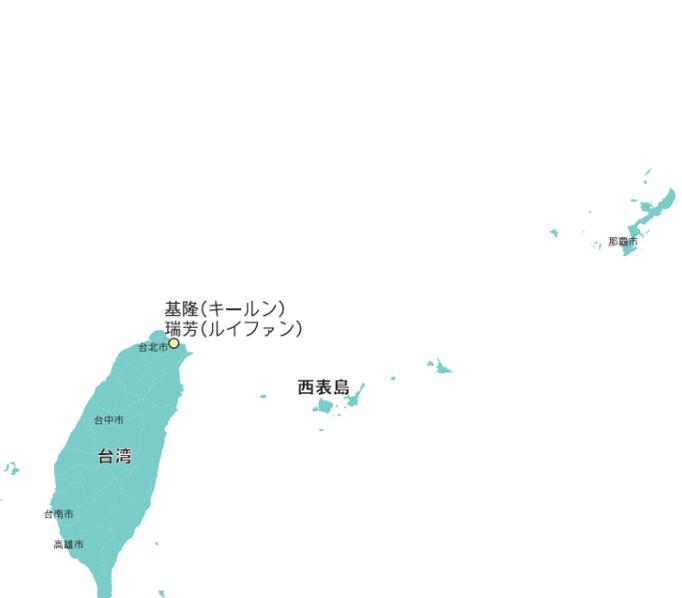
右のページは、内離島、外離島、西表島で採炭事業を行っていた主要な場所と炭鉱会社、それと日本が関係する世界的社会情勢をまとめたものです。折れ線は日本全国の石炭生産量の変化を表しています。

明治期に始まった西表島炭鉱の採炭ですが、大正期に入ると第一次世界大戦や重工業化時代に突入した国内産業による石炭の需要増大を受け生産を伸ばしました。炭鉱会社の数も増え、中小の下請け炭鉱も含めると相当な数の会社が採炭していたと思われます。

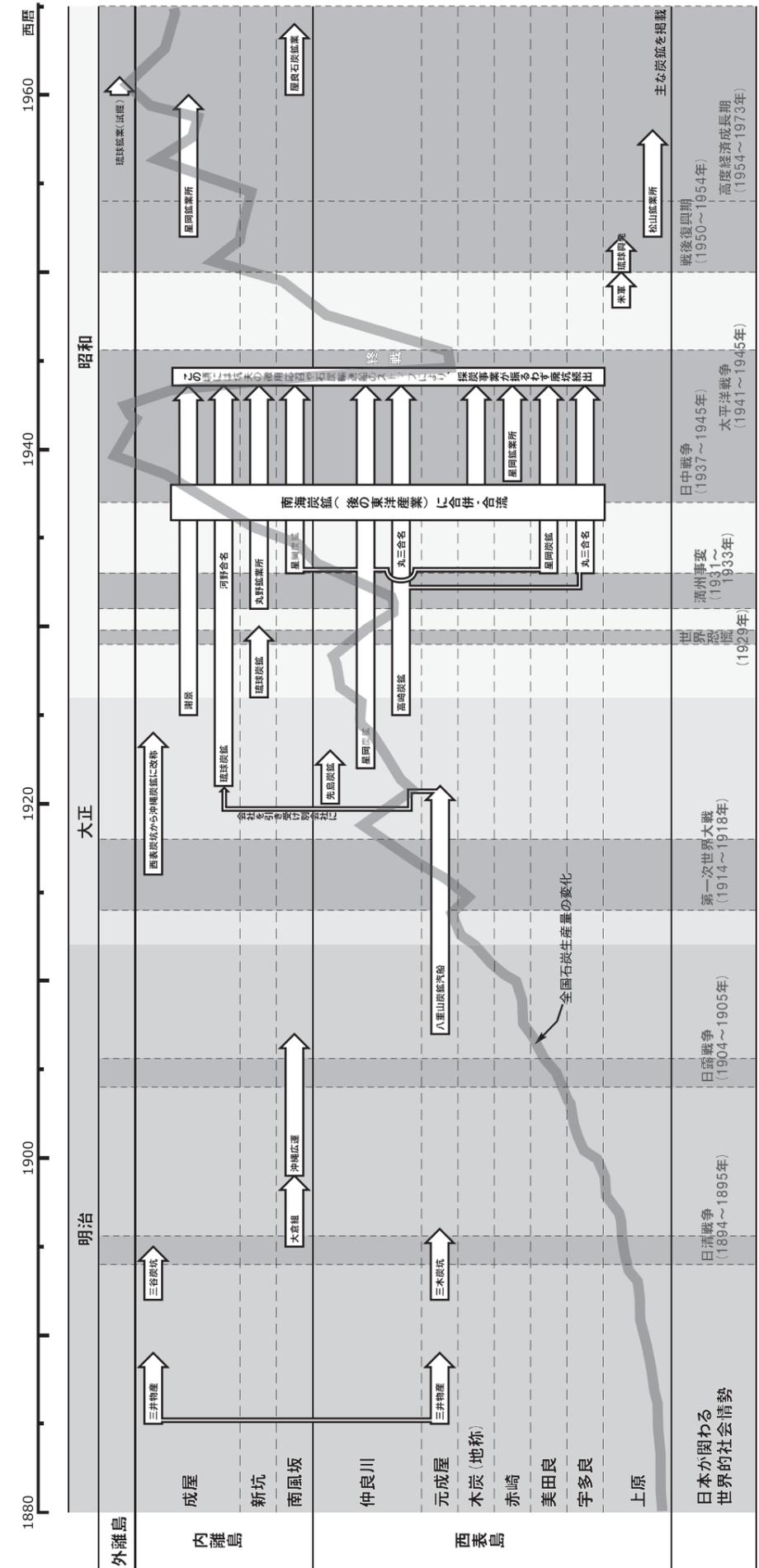
昭和に入ると1929年(昭和4年)の世界恐慌などによる影響を受け、生産量は全般的に落ち込みましたが1931年(昭和6年)の満州事変、1937年(昭和12年)の日中戦争を経て再び需要が増大し生産量が大きく伸びました。

しかし、国内の戦時体制下における状態を受け、坑夫が軍の労働力として徴用されるようになってから西表島の炭鉱は急速に衰退し、1943年(昭和18年)頃には事実上の事業停止となりました。戦後の西表島炭鉱は米軍による開発の後を受け細々と採炭していましたが、1960年代には全て事業を中止しました。

こうして約80年続いた西表島炭鉱の歴史を見ると、その時代の社会背景や経済状況などのすう勢(すうせい：ある方向へと動く勢い)に翻弄(ほんろう：もてあそぶこと)されてきたことがよくわかります。



西表島の炭鉱年表



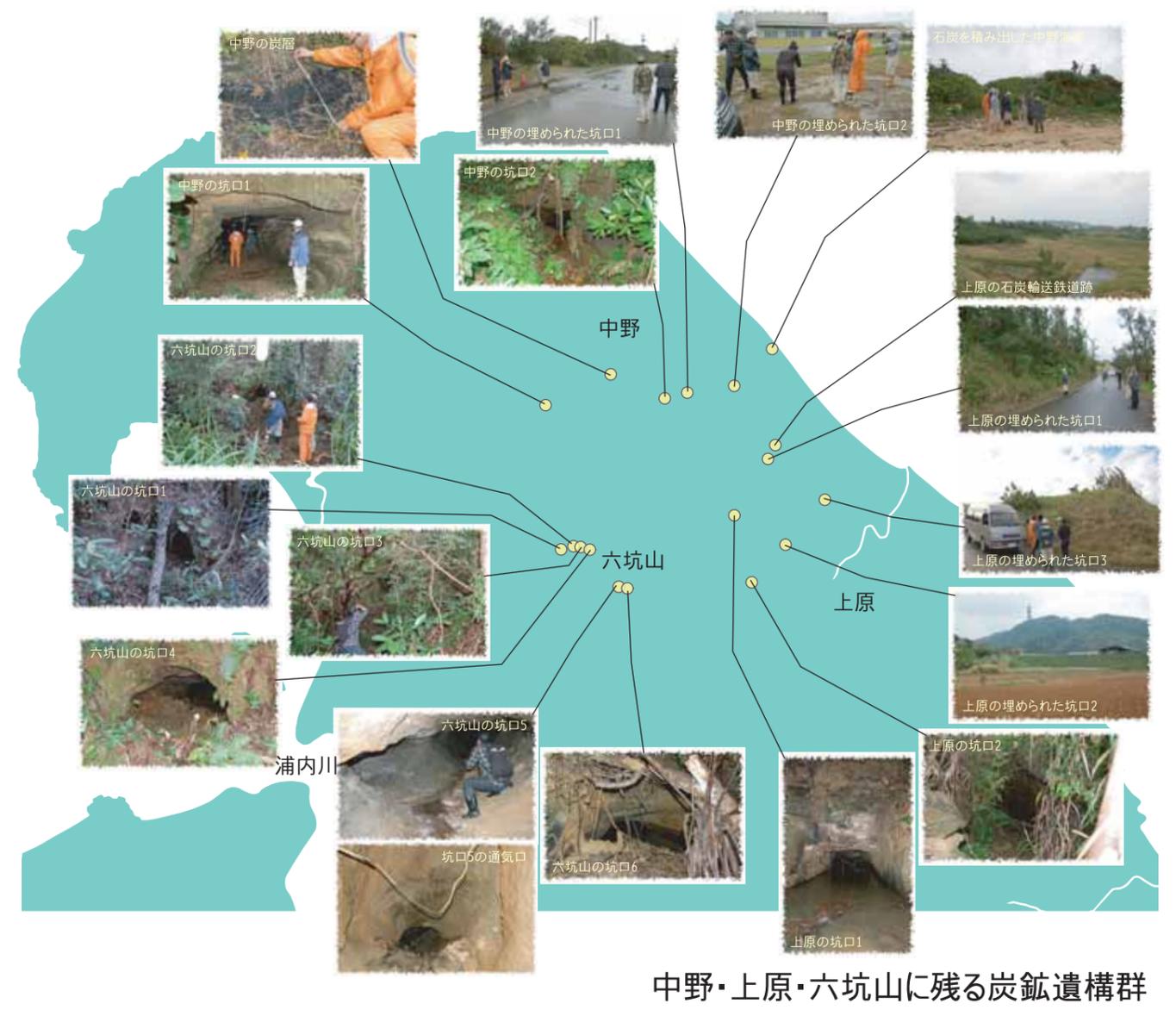
# 今も残る西表島の炭鉱関連施設

これまで見てきたように、西表島には多くの炭鉱がありました。しかし、現在、確認できる炭鉱関連施設はそれほど多くありません。ここでは内離島、中野・上原・六坑山、宇多良炭坑周辺で確認された炭鉱関連施設をまとめてみました。

炭坑関連施設は昭和期の宇多良炭坑が廃坑になってから60年以上が経過し、大正期の施設だとさらに古く老朽化が進行しています。この島の歴史を伝えていくためにも、今後、こうした施設の保存と利活用を考えていく必要があります。



内離島と元成屋に残る炭鉱遺構群



中野・上原・六坑山に残る炭鉱遺構群



宇多良炭坑に残る炭鉱遺構群

# 石炭と西表島の炭鉱に関する問題

この冊子の中から出題した問題です。いくつ正解できるか挑戦してみてください。

問1 石炭は何からできていますか？

問2 石炭として質が良いものから1～5までの順位をつけてください。

	褐炭	れき青炭	無煙炭	垂れき青炭	泥炭
順位					

問3 西表島の炭層は島のどの辺りにありますか。

問4 2007年、西表島の炭鉱関連施設が経済産業省から何の一つに認定されましたか。

問5 炭鉱で犠牲になった人たちの霊を弔う慰霊碑は西表島にいくつありますか。

問6 西表島の炭鉱には外国人坑夫が多くいましたが、どこから来た人が最も多かったですか。

問7 西表島の炭鉱を統合した三河の資本家山内卓郎は、なぜ西表島の炭鉱にまで手を伸ばしてきたのでしょうか。

問8 西表島炭鉱の坑夫はたいへん苛酷(かこく)な労働をさせられました。

その原因は何ですか。またその理由を書いてください。

原因：

理由：

## 参考文献・情報入手先

荒木裕・中川久夫 (1978) 琉球列島西表島の地質. 琉球列島の地質学研究, vol. 3, 53-60p.

エネルギー総合工学研究所石炭研究会 (1993) 石炭技術総覧. (財)エネルギー総合工学研究所, 東京.

石垣金星 (2006) 西表民謡誌と工工四. 西表をほりおこす会, 沖縄.

経済産業省 (2007) 近代化産業遺産群, -近代化産業遺産群が紡ぎ出す先人達の物語-. 経済産業省, 東京.

国土地理院 空中写真 (1964年、1977年、1994年)

三木健 (1982) 聞書西表炭坑. 三一書房, 東京.

三木健 (1983) 西表炭坑概史, おきなわ文庫07. ひるぎ社, 沖縄.

三木健 (1985) 西表炭坑史料集成. 本邦書籍, 東京.

三木健 (1996) 沖縄・西表炭坑史. 日本経済評論社, 東京.

三木健 (2003) 西表炭坑写真集新装版. ニライ社, 沖縄.

三木健 (2010) 八重山合衆国の系譜. 南山社, 沖縄.

三木健編 (2010) 西表島・宇多良炭坑萬骨碑建立記念誌. 萬骨碑建立期生会, 沖縄.

西岡邦彦 (1990) 太陽の化石：石炭, -アグネ叢書2-. アグネ技術センター, 東京.

沖縄県 (1987) 表層地質図, 西表. 沖縄.

沖縄県教育委員会 (1991年) 西表島上村遺跡, -重要遺跡確認調査報告- (沖縄県文化財調査報告書第98集). 沖縄県教育委員会, 沖縄.

goo辞書

<http://dictionary.goo.ne.jp/>

岐阜の地学・よもやま話

<http://chigaku.ed.gifu-u.ac.jp/chigakuhp/html/kyo/chisitsu/gifunochigaku/main.html>

海上保安庁海洋情報部 海上保安庁空中写真閲覧サービス

[http://www4.kaiho.mlit.go.jp/Aphoto/Air\\_code/INDEX/](http://www4.kaiho.mlit.go.jp/Aphoto/Air_code/INDEX/)

経済産業省資源エネルギー庁

<http://www.enecho.meti.go.jp/topics/hakusho/2009energyhtml/index2009.htm>

国立感染症研究所感染症情報センター

[http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k05/k05\\_04/k05\\_04.html](http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k05/k05_04/k05_04.html)

くしろ石炭.com

<http://www.946sekitan.com/>

九州大学総合博物館インターネット博物館石炭・金・地熱-九州の地下資源-

<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/MINE2001/index.html>

石炭エネルギーセンター

<http://www.brain-c-jcoal.info/worldcoalreport/index.html>



この地に刻まれた歴史を見つめるかのようにたたずむ供養塔

## あとがき

西表島の西部を流れる大河・浦内川の支流の宇多良川沿いに、レンガの支柱が今も立っています。ここはかつての貯炭場の跡で、支柱の上には石炭を積んだトロッコが走っていました。西表島炭鉱の数少ない産業遺跡で、2007年、日本近代化産業遺産群に認定されました。

かつて石炭は、エネルギー資源の主役でした。今は石油にその座を譲りましたが、長い間、工業化の原動力として産業を引っ張ってきました。西表島炭鉱もその一翼を担ってきたのです。

竹富町では日本近代化産業遺産群認定を契機に、2009年に「西表島炭鉱跡の保全・利用を考える検討委員会」を立ち上げ、3年間にわたりあらためて埋もれた島の炭鉱史を掘り起こし、保全と利用に関する調査・検討を行ってきました。その中で、学校の教材化や島を訪れる人の歴史学習の一助となる検討も行ってきました。

幸いにも林野庁が自然休養林の活用という観点から、宇多良の貯炭場跡に木道を設置したことで、炭鉱跡の安全な見学が可能となりました。あわせて、学校現場の教材化も最終年度で進められました。それがこの冊子であります。

この冊子では、石炭が日本の近代化にはたした役割や、その歴史についても触れ、それから西表島炭鉱の歩みを見るようにしました。当時の関係者が生存していない現在、その歴史を再現することはたやすいことではありませんが、幸いにも関係者の証言や当時の写真などが残されており、この冊子ではこれらを活かしながらビジュアルでわかりやすいように編集しました。

学校現場の教材はもとより、一般の方々の現地学習をする上で案内書としても良き伴侶となることでしょう。ここに編集にかかわった関係者の方々、製作の(株)水圏科学コンサルタント、そして田川市石炭・歴史博物館の福本寛学芸員にお礼を申し上げます。

検討委員会委員長 三木 健

## 西表島の炭鉱 ―西表島炭鉱の保全・利用を考える検討委員会編―

監 修 三木 健（委員長）  
石垣金星、伊谷 玄、平良彰健、津嘉山彦、森本孝房（五十音順）の各委員

発行年月 2011年3月 第一刷発行

発 行 竹富町商工観光課

製 作 株式会社水圏科学コンサルタント

協 力 福本 寛（田川市石炭・歴史博物館学芸員）

印 刷 サンプ rint株式会社